

慶應言語学コロキウム

意味論における内在主義と外在主義

Internalism vs. externalism in semantics

講師：西山 佑司氏（慶應義塾大学名誉教授・明海大学名誉教授）

[日時] 2019年1月12日(土)・13日(日) 13:00-18:30

[会場] 慶應義塾大学三田キャンパス北館3階大会議室

使用言語：日本語

*参加費無料・事前申込不要（会場にて参加者カードへの記入が必要となります）

「Chomskyは意味の問題を無視し、専ら形式的な統語論ばかりに集中している」はいわゆる認知言語学 (cognitive linguistics) サイドからしばしば生成言語学に対してなされるコメントである。実際、Chomsky自身、(1)を主張することもあり、そこから「生成言語学では意味論はなくなった」と考える向きもすくなくない。ところが、Chomskyは、別のところでは、(2a)とも述べ、また最近では(2b)のようなことまで主張する。

- (1) 自然言語には統語論と語用論のみがあり、意味論はない。Chomsky (2000)
- (2) a. 私は、もっとも初期の研究以来ずっと意味の問題に深い関心を寄せてきた。
b. 言語は、(音や他の外在化様式を伴う)意味である。Chomsky (2014)

本講義の目的は、一見矛盾しているように見える(1)と(2)の言明はなんら矛盾していないことを論じ、その議論を通してChomskyの意味論観を、言語哲学的背景をも踏まえて総括することにある。（講義内容の詳細については裏面を参照。）

[スケジュール]

第一日目

1. Chomskyの言語科学方法論
2. 外在主義の意味論 (externalist semantics)
3. 内在主義の意味論 (internalist semantics)

第二日目

4. 言語学の意味論で扱うべき具体例
5. Chomskyと語用論
6. 意味についての自然主義的な科学はどこまで可能か

【講義内容の詳細】

1. Chomskyの言語科学方法論

- 1.1 三つの特徴: (i) 方法論的自然主義 (methodological naturalism) (ii) 説明≠記述
(iii) 他の自然科学との統合 (unification ≠ reduction)
- 1.2 この方法論が含むところ: (i) I-language vs. E-language (ii) poverty of stimulus (iii) modularity
(iv) 「表示 (representation)」をめぐる誤解 (v) 「言語知識 (knowledge of language)」をめぐる誤解
(vi) methodological solipsism (vii) common sense concepts vs. scientific concepts

2. 外在主義的意味論 (externalist semantics)

- (i) **word-world relationship** を説明 (reference-based semantics)
(ii) D. Lewis (1970): 「表現と世界との関係を扱わないものは意味論ではない」
(iii) Frege流の哲学的意味論: 真理条件的意味論 (truth conditional semantics) 「Sinnは、Bedeutungを決定する」
(iv) Putnam (1970) の議論: 「意味は頭のなかにはない」
(v) 真理条件的意味論の問題点

3. 内在主義的意味論 (internalist semantics)

- (cf. Chomsky, Hornstein, Pietroski, McGilvray, J. Collins, R. Stainton)
- (i) **word-word relationship** を説明
(ii) 表現の指示 vs. 話し手の指示 cf. Donnellan (1966)
‘London’ の指示対象は決めようがない。cf. Chomsky (1993, 2000)
(iii) reference-based semanticsは科学になりえない。→ 真の認知科学はinternalist
(iv) 文に対して真理条件を与えることはできない。真理条件的語用論は可能。
(v) 《意味》(SEM)は、conceptual-intentional system (C-I system) に対して与えられる概念構築の指令 (instruction) であり、広義のsyntaxの一側面である。
(vi) 認知言語学における「捉え方の意味論 (construal semantics)」批判

4. 言語学的意味論で扱うべき具体例

- 4.1 古典的な例 cf. Chomsky (1977) 他
4.2 日本語の例 cf. 西山(2003, 2013), 西川(2013)
(i) 「花子の手」の曖昧性 cf. John's leg [Chomsky (1977)]
(ii) コピュラ文「私の意見は党の意見だ」の曖昧性(措定文と倒置指定文)
(iii) 「この村にロシア語を話す人がいる」の曖昧性(場所存在文と絶対存在文)
(iv) 「この映画は監督が主役だ」(6通りに曖昧)

5. Chomskyと語用論

- (i) 語用論はChomskyの言うごとく、pragmatic competence だろうか。
(ii) 関連性理論 (relevance theory) cf. Sperber & Wilson (1986/1995)
ostensive-inferential communication を可能にする心的メカニズムの探求
(iii) conceptual-intentional system (C-I system) の中身は何か。

6. 意味についての自然主義的な科学はどこまで可能か

[お問い合わせ先]

〒108-8345 港区三田2-15-45 慶應義塾大学言語文化研究所
電話: 03-5427-1595 (事務室直通) メール: genbu@icl.keio.ac.jp
<http://www.icl.keio.ac.jp>